

データで見るコロナ禍での「感謝」と「怒り」

— エssenシャルワーカーに感謝している人ほどルール違反者に怒り —

部長 兼 主席研究員 宮木 由貴子

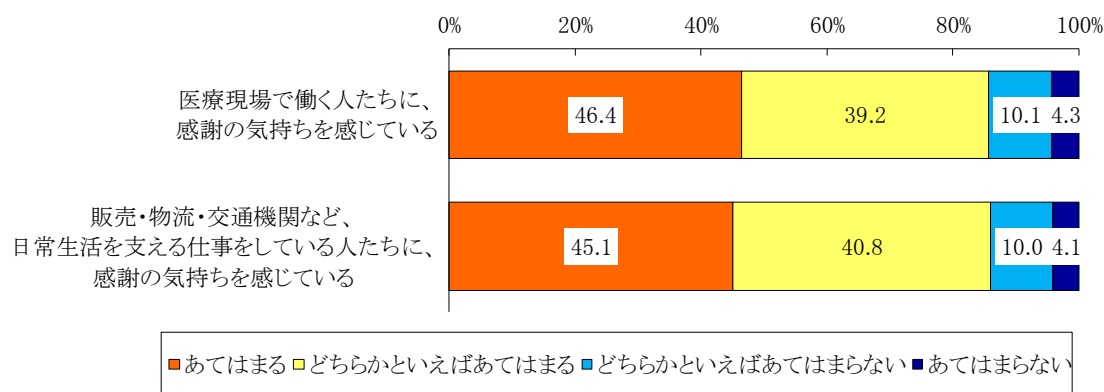
新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、様々な側面で人々の意識や行動が変化している。本稿では、緊急事態宣言が一部解除された翌日の2020年5月15～16日に当研究所が実施した「第2回新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査」*¹をもとに、エッセンシャルワーカーに対する感謝の気持ちと、感染拡大防止に非協力的な人に対する怒りの感情についてのデータから、コロナ禍の長期化による課題について考察する。

<非常に高いエッセンシャルワーカーへの感謝の気持ち>

新型コロナウイルスの感染拡大により緊急事態宣言が発令され、多くの人々が自粛生活に入った。本調査結果からも、ゴールデンウィークの予定を変更して「STAY HOME」を実行した人が多いことが確認されている（図表省略*²）。また、制限された環境下での必要最低限の行動についても、第1回調査（4月3～4日実施）*³に比べ、さらに高い割合で3密を避けていたことがわかっている（図表省略*⁴）。

在宅勤務に切り替える就労者も多い中、医療従事者や販売・物流・交通機関などで働く、いわゆる「エッセンシャルワーカー」といわれる職業の人たちは、マスクや消毒液が十分に確保できない中でも、業務を継続した。こうした人々に対する感謝の気持ちは、募金や必要な物資の寄付、SNS などを通じた激励や感謝のメッセージ、医療従事者への感謝の気持ちを表明する「ブルーライトアップ運動」などで示されてきた。

図表1 エッセンシャルワーカーへの感謝の気持ち



具体的にどの程度の人たちが感謝の気持ちを感じたのかをみると、「医療現場で働く人たちに、感謝の気持ちを感じている」については、「あてはまる」とした人だけで46.4%に及び、「どちらかといえばあてはまる」(39.2%)とあわせると85.6%が感謝の気持ちを感じていると回答した(図表1)。

また、「販売・物流・交通機関など、日常生活を支える仕事をしている人たちに、感謝の気持ちを感じている」とした人も、「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の合計で85.9%と、医療従事者と同程度の高い割合を示した。

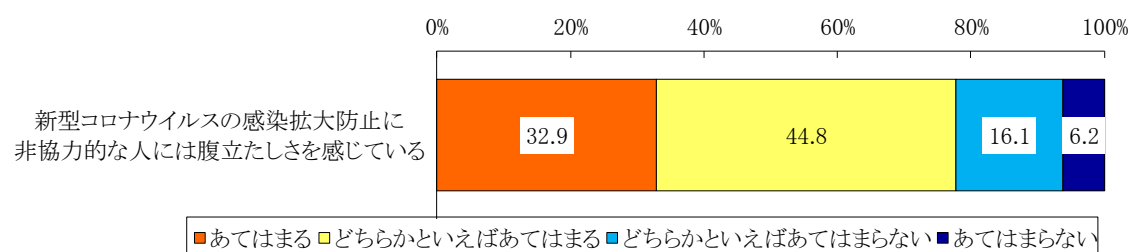
長く続いた自粛生活において、多くの人がストレスや不安を抱えながらも、感染拡大防止と日常生活の維持継続に尽力してくれた人たちに対する感謝の気持ちが持てたことは、エッセンシャルワーカーとして働く人々への応援になっただけでなく、感謝の気持ちを持つこと自体が人々の癒しになったのではないだろうか。

<感染拡大防止に非協力的な人に対する腹立たしさも>

一方で、「新型コロナウイルスの感染拡大防止に非協力的な人には腹立たしさを感じている」についてみると、「あてはまる」(32.9%)と「どちらかといえばあてはまる」(44.8%)の合計で、77.7%が「あてはまる」とした(図表2)。

エッセンシャルワーカーへの感謝の気持ちが強い一方で、感染拡大防止に真摯に向き合わない人に対するいらだちの強さが垣間見える結果といえる。実際、身勝手な行動で感染を広げてしまった人への制裁ともいえる行動や、マスクをしない人への暴言など、「自粛警察」などと呼ばれる過剰な行動をとる人がクローズアップされた。長引く自粛生活のストレスが、「正義」という大義名分をもった他人への攻撃的な言動につながったようにも思われる。

図表2 感染拡大防止に非協力的な人への腹立たしさ

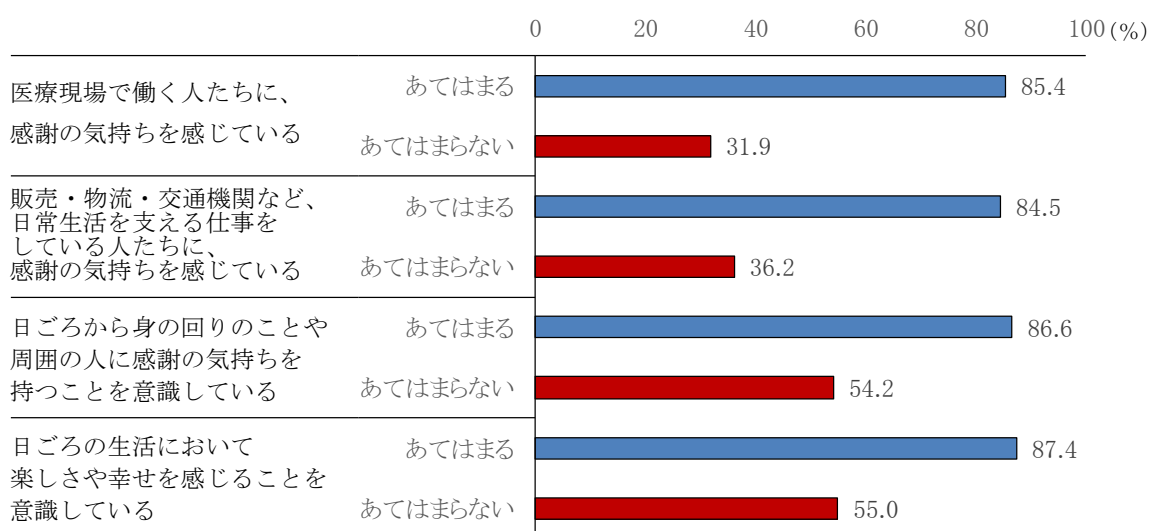


さらに危惧されるのは、感謝の気持ちを持っている人ほど非協力者に対して腹立たしさも感じているという事実である(図表3)。例えば、医療従事者に感謝の気持ちを持っている人で、感染に非協力的な人に腹立たしさを感じている人は85.4%おり、感謝の気持ちを持っていない人の割合(31.9%)を53.5ポイントも上回っている。言い換えれば、エッセンシャルワーカーに感謝の気持ちを持つ人は、感染拡大防止に非協

力的な人に対する許容度が低く、怒りの感情を持つ可能性が潜在しているということだ。

さらに、「日ごろの生活において楽しさや幸せを感じることを意識している」「日ごろから身の回りのことや周囲の人に感謝の気持ちを持つことを意識している」など、普段からポジティブな思考を持つ人でも、非協力者に対して腹立たしさを感じやすいことも示唆された。

図表3 感染拡大防止に非協力的な人に腹立たしさを感じる割合
(感謝の気持ち・楽しさや幸せ意識の有無別)



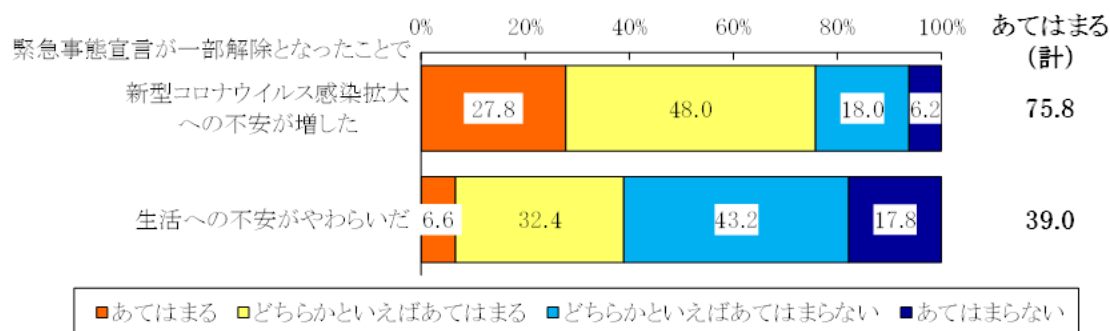
注:「新型コロナウイルスの感染拡大防止に非協力的な人には腹立たしさを感じている」について「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」とした割合の合計

<緊急事態宣言解除後も不安は続く>

今回の調査は、5月14日に緊急事態宣言が一部地域(39県)で解除された直後に実施されている。そこで、これによる不安感・安心感の変化についてたずねた(図表4)。

緊急事態宣言が一部解除となったことで「新型コロナウイルス感染拡大への不安が増した」と回答した人(「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の合計、以

図表4 緊急事態宣言解除による不安感・安心感の変化



下同じ)は75.8%にのぼり、4人に3人は不安が増したとした。一方で、「生活への不安がやわらいだ」と答えた人は、39.0%にとどまっている。それまでの自粛生活から、移動や娯楽についてある程度の自由が得られたものの、それは生活の安心感というよりは、感染の再拡大への不安をより強くもたらしたようである。

<ストレスコントロールがこれからの課題>

コロナウイルスとの戦いは、まだしばらくは継続する。それを人々がわかっているからこそ、緊急事態宣言解除後の不安の高まりともいえよう。人々の危機感がある程度継続することは、感染拡大を防ぐという上で有効といえる。

しかし、危機感を持つべき事態の長期化を理解していることと、ストレスコントロールができていないことは異なる。コロナ禍を乗り切るために連帯と協力が不可欠とされる中、「感謝」のような正の感情を持つ人ほど、ルール逸脱者への負の感情も強く持ってしまうがちだとすれば、そこに大きな分断が生じる可能性も否定できない。そうした歪みが、直接的な暴力としてだけでなく、ネットにおける匿名での攻撃などに現れる危険性について、社会は意識しておく必要があるだろう。

長期化するコロナウイルスとの戦いにおいては、今後、感染予防以外の様々な面での支援や調整が必要なフェーズに入る。その大きな課題の1つがストレスコントロールになるであろう。

(ライフデザイン研究部 みやき ゆきこ)

【注釈】

- *1 調査の方法や結果の概要は、当研究所発行の以下のニュースリリースを参照されたい。
 - 「第2回 新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査（働き方編）」
http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/news2005_02.pdf
 - 「第2回 新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査（消費編）」
http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/news2005_03.pdf
 - 「第2回 新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査（健康編）」
http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/news2005_04.pdf
 - 「第2回 新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査（つながり編）」
http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/news2005_05.pdf
- *2 この結果は*1の消費編（p.5）で紹介している。
- *3 調査の方法や結果の概要は、当研究所発行の以下のニュースリリースを参照されたい。
 - 「新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査（前編）」
http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/news2004_01.pdf
 - 「新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査（後編）」
http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/news2004_02.pdf
- *4 この結果は*1の健康編（p.4）で紹介している。

*弊社ホームページの「新型コロナウイルス意識調査特集ページ」にて、
これまでに実施した調査のリリースやレポートを公開しています。
http://group.dai-ichi-life.co.jp/cgi-bin/dlri/ldi/total.cgi?key1=v_year